

要 約

報 告 番 号	① 乙 第	号	氏 名	紙 本 貴 之
主 論 文 題 名 Impact of the COVID-19 Pandemic on Physical Function Among Community-Dwelling People With Disabilities in Japan: A Follow-Up Study (日本の障害を持つ患者におけるコロナウイルス蔓延の身体機能への影響に関するフォローアップ研究)				
(内 容 の 要 旨) 2020年にコロナウイルスの蔓延により人々の生活様式は大きく変化した。Kamimotoら(2022)により、デイケア利用者の身体機能は緊急事態宣言を境に悪化し、2020年末まで悪化し続けることが明らかになった。しかし、その後も長期化したパンデミック中も身体機能が悪化し続けたのか、それとも改善したのかは不明である。そこで本研究では、コロナウイルス蔓延前の2018年初めから2022年末までのデイケア利用者の身体機能を継続的に調査し、地域在住の障害を有する患者におけるパンデミックの影響の特徴を明らかにすることを目的とした。 デイケアの利用を2018年7月までに開始し2022年7月まで継続していた患者を対象に、2018年1月から2022年12月の3～6ヶ月ごとに測定したデータを後方視的に調査、6ヶ月を1期間とし、2018年前半(1～6月)から2022年後半(7～12月)の10期間の欠測を含む継続的データについてMixed-effects Model Repeated Measures (MMRM)を行い、各期間で多重比較検定を実施した。解析対象者は169名、その内訳は年齢70.38±9.95歳(2020年1月1日時点)、男性91名、女性78名、疾患は脳・血管疾患120名、運動器疾患29名、その他20名であった。 結果、一元配置分散分析で、歩行速度(m/秒)は2020年前半の段階から急速に低下し、2020年後半にかけてさらに悪化、その後も低下した状態が続き、2022年後半でさらに低下した。一方、Timed Up and Go Test (TUG) (秒)は2020年以降に時間経過とともに悪化を続けた。2018年前半の時点での歩行速度で歩行速度高速群と低速群に分けて比較した二元配置分散分析の結果、歩行速度に交互作用はないが、TUGは交互作用を認めた。歩行速度低速群では2019年後半から2020年前半にかけて有意に歩行速度が低下し、変化が鋭敏に出ていることが示された。また、歩行速度低速群では2020年前半と比較して2021年後半以降で有意にTUGが増加し機能低下を認め、高速群と比較してその変化量も大きいことが示された。さらに、2019～2020年のデータを用いた先行研究では有意な変化を認めなかった歩行速度高速群においても、その後にTUGが増加し機能低下を認めることが示された。 以上のことから、歩行速度低速群は高速群と比較し、脆弱なグループであることから、このグループに対してはより重点的な対応を考える必要があることが示唆された。しかし、コロナウイルス蔓延に伴う生活様式の変化によるデイケア利用者への影響は歩行速度低速群だけでなく高速群にも見られ、それは一過性ではなく、一度悪化した身体機能の改善は難易度が高いため、運動の負荷量や実施頻度等を含め、リハビリテーションプログラムの再考が重要と考える。				